

忍びと瑠璃

「瑠璃、じゃな」

目の前をツイッ、ツイッと飛ぶ青いトンボを見た鬼丸は、ふとつぶやいた。

仏の宝のひとつだという瑠璃を、十九になったばかりの鬼丸は、もちろん見たことはない。だが、昨日、密かに忍び入った安楽寺の三重塔の中を細い格子の囲い越しにのぞいたとき、尊い大日如来の光背にやはり青い色がちらりと見えた。そして故郷では見たこともないマダラヤンマにも同じ色がある。これは仏の使いのトンボだと鬼丸は思い至ったのである。

慶長四年(西暦一五九九年)秋。この翌年、関ヶ原で大戦になるとは、まだ誰も知らないころ。

鬼丸は十日前から、兄貴格の黒丸とともに信州上田・塩田平の溜池工場の現場で働いている。水の利が悪いこの地域では、しばしば水不足が起きるため、昔から溜池が作られてきた。これからさらに田畑を広げるため、農閑期に拡張工事や新規の溜池作りを行うのである。鬼丸は掘り広げた池の土手に腰かけ、夕陽に羽を光らせるトンボをしばし見ていた。

稲はすでにきれいに刈り取られ、切り株が整然と並んでいる。その軸の太さを見れば、今年はずまずの豊作だったことがわかる。空気は澄んでいて、鬼丸が暮らす江戸のほこりっぱさとはえらい違いだ。急速に町づくりが進む江戸は、普請ふしんだらけで、土埃がすさまじく、目に入ったごみをとることを商売にする者までいる。

鬼丸と黒丸は、ともに徳川の忍びだ。九年前、徳川家康の江戸入城にしたがって、彼らも江戸近郊に暮らすことになったが、指令を受ければ各地に散って情報を集め、時には暗殺にも手を染める。鬼丸は出張仕事は初めてだが、三十代半ばの黒丸は、幾度もこうした仕事をしたことがある。忍びとして働き盛りとっていい。今回は、上田の真田一族の動きを偵察するのが、彼らの仕事だ。

大坂では、太閤秀吉の死後、幼い跡取り秀頼を助けるため、前田利家ら五大老と石田三成ら五奉行が政まつりごとを行うことになったが、実質、天下の中心にいるのは家康だった。それを豊臣恩顧の者たちが許すはずもなく、大きな衝突は避けられそうもなかった。そうなる

と徳川方としては、真田一族の動きが気になる。なにしろ、真田昌幸は、過去に、この上田の地で徳川軍を退けたことがあるのだ。かつて武田に従っていた真田は情勢を見て、手のひら返しもして見せる。油断ならない相手だ。嫡男の信幸は、徳川四天王のひとり、本多忠勝の娘を妻としており、家康に味方すると思われるが、昌幸が何を考えているのか、つかめないのが現実だった。実際、この時期、昌幸は京にいたはずだったが、人知れず上田の地に戻っていた。それはいずれくる合戦のために軍備を整え、城の改修などを指図するつもりではないのか。鬼丸と黒丸は、真田の動きを探り、必要とあれば彼らの命を奪う覚悟でこの地に来ている。

「それにしても」

人夫が寝泊まりする小屋に向かう途中、人気がないことを確かめて、鬼丸は黒丸に話しかけた。

「我らの素性などを詳しく調べもしないで工事に入れるとは、いくら人手が欲しいからといって、この地の者たちはのんびりとしておる。これでは忍びは入り放題じゃ」

「それが真田の策かもしれない。我らにわざと違うことをつかませて報告させる。それくらいのことをやりかねんぞ。よくよく気をつけることだ」

人夫は、ほとんどが近隣の農民たちだったが、中にはかなり遠方から流れてきている者たちもいた。鬼丸は、さすがに黒丸はよく見ていると思った。江戸に親がいる自分とは違って、早くに身内を亡くして、里の長老に育てられた黒丸は、一人っ子の鬼丸にとって厳しくも優しい兄だった。今回の上田行の相棒に自分を選んでくれたことを、鬼丸は誇らしく思っている。

「おもうは、どうしているかのう」

女忍びのおもうも同じくこの里に入り、今は昌幸の屋敷に下女奉公している。鬼丸にとって七つ上のおもうは、幼なじみの親しさと姉のような頼もしさの両方を感じる存在だった。忍びの働きとしては、おもうは大先輩で、今から十年前の天正十七年(西暦一五八九年)、

石田三成が、大谷刑部、真田信繁(幸村)とともに北条方の忍城攻めを行った際、おもうは現地に潜入して、その戦の行方を追った。実戦経験の乏しさを言われていた三成は、大規模な普請で忍城を囲い、水攻めにしながら、ついに落とすことができなかった。このことで、三成は「戦下手」との評がますますついて回ることになった。

だが、鬼丸にとって、三成の評価などはどうでもよかった。何より気になったのは、こ

の任務から戻ったおもうが身ごもっていたことだった。女の忍びが男と寝て、寝物語に情報を得ることはよくある。男の忍びが潜入先の遊女の話聞きとると同じことだ。おもうがどういいういきさつで身ごもったかなど、里では一切問題にされず、本人も何も語らない。翌年、おもうは女の子を生んだ。

鬼丸は、今回、おもうが久しぶりに遠方への潜入を引き受けたのは、おさとと名付けた娘の手が離れたこともあったが、やはり忍びとして働きたかったのかとも思う。驚いたことに上田潜入が決まると、おもうは猛然と太り始めた。芋や栗、ひえや粟を食べに食べ、細くしまったからだをぶよぶよにした。里の婆の知恵で、臭い猪の脂を髪に付けて太陽光にさらして、美しい黒髪をくすんだ土色にした。万が一、忍城攻めの際の顔見知りに出会っても気づかれないようにという配慮だったが、野百合のようなおもうの面影を消されていくようで、鬼丸は少し悲しかったのだ。

鬼丸たちより先に上田に着いたはずのおもうからは、まだ、つなぎがない。

人夫たちの小屋で、玄米に菜漬、きのこがたっぷり入った味噌の汁を腹に入れると、鬼丸は外に出た。忍びの足なら、夜目でも自在に走れる。なるべくこの里の地形を頭に入れておくつもりだった。

黒丸は、また地元の人夫たちと地酒を酌み交わすつもりなのだろう。鬼丸も四度ほどつきあったが、そこで必ず出るのが、天正十三年(西暦一五八五年)、わずか千数百人の真田軍が七千もの徳川軍を撃退した話だった。「あの折の昌幸さまのご采配は実に見事だった」「うちの親も鋏を手に城に駆けつけたそうじゃ」勝ち戦の話をくどいほどに聞かされることになったが、それほど地元では真田の人氣が高い。いざとなれば、領民たちも戦う覚悟ができていようにも見える。あの忍城が、城を水浸しにされながら、最後まで落ちなかったのも、城に籠る甲斐姫たちを慕う地元民の結束があつたからだと聞かされている鬼丸は、改めて真田とは戦いにいくと考え始めていた。

加えて真田には、腕利きの忍びがいるという。

「霧隠才蔵…」

黒丸を超える忍びがこの世にいるとは、鬼丸には信じられないが、この名を口にしたときの黒丸の引き締まった横顔をよく覚えていた。才蔵はこの里にいるのか、それとも自分たちと同様にどこかに潜入しているのか。いずれにしても、どこかでその姿を見たい、できれば戦ってみたいと思う。

夜気は日に日に冷たくなっていく。

鬼丸は、今夜は生島足島神社に行くつもりだった。昨夜の安楽寺とともに地元では深い信仰を集める社と聞いている。北条氏や武田氏も崇拝したという神がどんなものか。一度見ておこうと思っただ。うす暗い林を抜け、石畳を行くとりっぱな鳥居があった。草むらから、虫の音が聞こえる。この時刻になると、参拝する者はいないようだ。

「そなたは…忍びかの」

突然、暗闇から低い声がして、鬼丸は、体を固くした。辺りに気を配っていたつもりだったが、気づかなかった。そのうかつさが鬼丸を焦らせた。右手は懐の小刀を握る。

「その足音でわかるのさ。まだ若いな…」

大ケヤキの陰から出てきたのは、子供ほどの背丈の老婆だった。つぎがあたった野良着だが清潔で、手にした杖も太い竹に握りやすくするための浅黄色の紐が巻いてある。目は閉じたままで、あまり見えないらしい。

「婆も昔は地の草として働いたものじゃ」

地の草とは、農民や商人としてその地に根付き、密かに活動する者たちである。おもうとのつなぎも、こうした者たちから黒丸が拾ってくる。ときには木の実の中に入れた小さな密書をやりとりすることもあるという。鬼丸は、まだこの地の草と接触したことがない。

「婆は誰の草じゃ」

「遠い昔のことじゃ。わしの一族は絶え果てて、もうわし一人しかおらん。ほれ、柿を食べえ」

見えないはずだが、柿は正確に鬼丸のところに飛んできた。

「油断ならぬ婆じゃな」

「ほうか。それは誉め言葉じゃな」

鬼丸は、かりつと音をたてて柿をかじった。甘い。江戸の柿とはどこか味が違うようにも思える。

「りっぱな社じゃのう」

「このご神体は、大地。すなわち国土そのものじゃ。信濃だけではない、西国も東国も豊かなこの国のすべてを守っててくださいる」

「わしは神というものを見たことがないぞ」

「お前がもし、真冬までこの地におるのであれば、西の鳥居の向こうに日が沈むのを見ることがある日はあるはずじゃ。そうすれば何かを感じることが出来るやもしれん」

「婆は見たのか」

「見た。鳥居の中におてんとうさまと女神岳が見えての。神々しいとは、このことじゃと思つたものじゃ」

「わしも見てみたいものじゃ」

「ならばその命を大事にすることじゃ。真田の忍びは強い。気を緩めてはならん」

言われなくてもわかつておる、と言いかけた鬼丸だったが、口からは出てこなかった。

「：柿、うまかつたぞ」

柿の軸を放り投げると、鬼丸は夜道を駆け戻った。

小屋に戻ってから、神社で出会った婆のことを黒丸には言えずにいた。よそ者と接触している場を見られると、地の草たちが怪しまれ、最悪の場合、命にも関わる。黒丸からは地元の人と接しないと言われていた。鬼丸は、とにかく黒丸には心配をかけたくなかった。近頃、とても疲れた顔をしているのは、仕事に不慣れな自分がいっしょにいるせいで、思うように動けないからではないかと感じるからだ。

おもうからつなぎが来たのは、三日後だった。昌幸が、別所温泉に行くようだという。おもうも下働きとして同行することだった。

塩田平の西端に位置する別所温泉は、平安時代に淳和帝が入湯したと伝わる古い温泉で、かの木曾義仲の愛妾・葵の前が訪れたことでも知られる。鬼丸は、近くの安楽寺や北向観音を下見していたので、道筋は頭に入っていた。

「そもそも真田は、京にいたことになっておるはずじゃ。城に武具を運び込んでおる様子もなく、今度は温泉じゃと。ようわからん」

「どうやら新しい妾ができたらしい。それもまだほんの小娘と聞いたぞ」

鬼丸は、一瞬、おもうのことが頭に浮かんだが、あの容姿はとても小娘とは言い難く、そのことは頭から追い出した。それにしても五十の坂を越えた昌幸が小娘の妾を連れて湯につかっているとを思うと、ますます食えない親父だと思えてくる。

溜池の工事はあらかた片付きかけていたから、自分の田畑の手入れをするために地元に戻る者もぽつぽつ出てきていた。人が動いている時の方が、忍び仕事はやりやすい。黒丸と鬼丸も何気なく荷物をまとめ、溜池から去った。

別所温泉の中心にある北向観音堂の参道は、小春日和とあって、善男善女、多くの参詣人が訪れていた。参拝客を目当てにだんごや栗を焼く香ばしいにおいがする。

鬼丸と黒丸も人にまぎれて昌幸の一行が到着するのを待ったが、人目を気にしたのか、

彼らが一番大きな湯宿に入ったのは、夜半だった。馬に乗った昌幸と妾のおはとが乗る奥の後ろに連なる警護の侍、荷物を抱えた従者の中にももうもいた。鬼丸は、すぐさま宿の床下か物陰に潜むつもりでいたが、黒丸に押しとどめられた。

「おそらくあやつらは侍のふりをした忍びじゃろう。下手をすれば感づかれる。ここはおもうに任せよう」

宿の者に迎えられ、黒いひげを揺らしながら、満足気な顔で入っていった昌幸の顔を鬼丸は頭に刻み込んだ。

その夜は、近所の農家に米を渡し、軒先を借りることにした。

「やはり、こいつらは忍びか…」

湯宿で荷ほだきをするおもうも感づいていた。京から昌幸が密かに上田に戻る際に同行した侍たちの半数は、めったに話もせず、目配りが鋭い。だが、残りの半数は馴れ馴れしいほどに下働きの者たちに話しかけてくる。おそらく昌幸の留守中に怪しい者が入っていないか、城下でおかしな動きがなかったか、探ろうとしているに違いない。ここには無口な組がついてきた。おかげでうるさくなくて助かるが、黒丸につなぎをしたくても、やつらの目があつて動きにくいのが困る。北向観音の茶店のひとつに地の草がひとりいて、それを頼りにするほかはなさそうである。

「殿が白湯を所望じゃ」

お供の烏森三左衛門がおもうに声をかけてきた。この男の声を聞いたのは初めてだった。だが、どこかで聞いたことがあるような気もする。おもうは声を出さず、うなづいた。殿様に白湯を運ぶなど、いつもは城の侍女の役割だが、うわさ好きの女たちを連れてくると、妾の話がたちまち広まり、昌幸の妻・山手殿の耳にも届く。そのことを避けるためか、同行した女は飯炊きの婆ふたりとおもうだけだった。ここではおもうの仕事も増えそうだし、ひざをつけてゆっくり立ち上がると、おもうは炊事場で湯を沸かし、客間の昌幸のところへ運ぶ。耳をすきましたが、小娘の笑い声が響くばかりで、大事な話はなされてないらしい。

「そなたははとではなく、まるで鹿のようじゃ。よう跳ね回る」

「嫌ですわ、殿様。鹿は皮をはがれて殿様のお尻に敷かれてしまいます」

「わしはいつも尻に敷かれておるからもう」

「まあ、ふふふふ」

これでは、黒丸に報告しようがないではないか。夜露をしのぎながら、こちらの知らせを待っている黒丸と鬼丸のことを思うと、申し訳ない気がしてくる。

「それもこれも」

真田昌幸という男の本心がかみにくいためであった。宿の者が用意した丸々と太ったいわなの塩焼きを「うまい、うまい」とほおぼり、酒を存分に飲んで、ろくに湯にもつかりもせずに寝所に入った昌幸からは、はかりごと謀の気配は感じられない。かまどで火の始末が終わった夜中、飯炊きの婆たちと湯につかりながら、おもうは目を閉じた。

信州最古の温泉と言われる別所の湯は無色透明でなめらかだった。飯炊きの婆たちも「若返りそうじゃ」と喜んでいる。

忍びの女が己の容姿を気に掛けることなど、あつてはならないことだが、こうして裸になつてみると、急激に太った体は重く、醜く思えた。まだ、三十までには数年あるが、すすけた髪を束ねた自分は四十を超えて見えるだろう。十年前、さとをみごもったころは、身も軽く、戦場で働く男たちに食い物を配りながら、若い娘に注がれる視線を常に感じていたものだった。あのと看上げたのは、明るい夏の夜空だったが、今は濃厚な黒い空に秋の星が光っている。

「おもう、明日は蕎麦粉を手に入れてきてくれんか。以前も殿様は急に蕎麦を食べたいと言われたことがあつてのう」

「ほんに突然にあれが食いたい、これはないかと言われる殿様なのじゃ」

婆たちに声をかけられて、おもうは我にかえった。宿から出る用事ができるのは、好都合だった。

「あい。朝いちばんに庄屋に聞いてまいります」

翌朝、庄屋に紹介された農家で蕎麦粉を求め、帰りに北向観音の草のもとを訪ねたおもうは、そこでも何も情報を得られず、少しがっかりしながら宿に戻った。すると、婆からせっかく蕎麦粉を手に入れてもらったが、今日殿様は安楽寺に出かけ、そこで和尚と語るうため、夕餉は必要ないと言われた。いつもの気まぐれ、思いつきの行動ともれたが、妾は宿にとどめ、昌幸は三左衛門らと寺に一泊してくると聞いて、おもうの勘は「あやしい」と音を鳴らし始めた。このことはすぐに黒丸に知らせねばならない。

「さきほどの庄屋のところに食べごろの柿が実ってありました。今宵はおはとさまにその柿をご用意いたしましょうか」

「おお、よう気が利くの。あのお方は殿が寺に行くと言われてから、機嫌が悪うて困っておるのじゃ。悪いが頼めるか」

「あい」

再び宿を出ようとしたおもうは、勝手口の前にいた三左衛門と出くわした。

「どこへ行く」

「おはとさまの夕餉に出す柿を求めに参ります」

三左衛門はかすかにうなづいたように見えたが、それにかまわずおもうは頭を下げ、歩き出した。背中に三左衛門の視線を感じるような気がしたが、振り返ってはならない。とぼとぼと進み、決して速足にならないよう気をつける。

あの男は、なぜ、勝手口にいたのか。警護のためか、それとも、目立たぬように誰かをつなぎをするためか。宿を背に立ち、誰かを待っていたようにも思える。ますます、あやしい。

庄屋で柿を手に入れると北向観音の草のもとに出向き、昌幸の動きを黒丸たちに知らせるよう頼んだ。草の男は四十がらみで客商売らしく愛想はいいが、おもうの記した密書を見た後の動きは的確だった。これで黒丸には、しっかり話が伝わるだろう。

おもうから知らせを受けた黒丸は、一度どこかへ出かけたが、しばらくして戻り、鬼丸と安楽寺にでかけた。食料を手に入れてきたらしい。鬼丸は安楽寺には行ったことがあったので、案内役を引き受けた。

鎌倉時代、惟仙和尚いせんおしょうによって開創された安楽寺は、信州最古の禅寺として知られる。木々が繁る林の道を登ると、光背に瑠璃を背負う仏が安置される木造の八角三重塔が見えた。キーキーというヒヨドリの鳴き声が響く。本堂はうかつには近づけないが、木立と夜がってくる闇に紛れて、様子をうかがうことはできそうだ。

「今のうちに腹の中に入れて置け」

黒丸は、つぶした飯を固めて味噌が塗られた食い物をいくつも出した。ありがたいことに草の男が用意して、寺の近くに隠しておいてくれたらしい。黒丸と鬼丸は、黙って飯を腹に入れた。

昌幸の一行が現れたのは、日が暮れようというところだった。昌幸は、陽気な様子で八人の供を従えて、山門をくぐっていく。岩陰からその様子を見ていた黒丸は、そこに烏森三左衛門がいることを確かめた。烏森は、あの忍城の戦の際にも昌幸の最側近として近くにいた男だ。忍びではないが、目の配りにも足運びにも隙が無い。他の七人には見知った顔はなかった。選り抜かれた遣い手であることは間違いない。

やがて林は闇に包まれた。寺の周りは、真田の侍が警備をしている。やはりただの訪問ではない、と鬼丸が思った時、小さな灯りが山門に近づいてくるのがわかった。

(何者だ…)

鬼丸は目を凝らした。カシャ、カシャと腰の太刀の音が響く。五人の供を連れている。小者ではないらしい。出迎えた寺僧の持った灯りに一瞬、照らされた顔を見た黒丸は、それが誰かわかった。彼らが奥へと進んだのを見計らって、黒丸は鬼丸にささやいた。

「あれは大谷刑部おおたにぎよぶの家老じゃ」

「……！」

大谷刑部吉継は、秀吉の存命時には、石田三成らとともに秀吉の有馬温泉の湯治に同行したり、九州征伐や朝鮮出兵の戦でも活躍した大名で、筋を通す男として知られていた。

忍城攻めにも序盤、真田とともに参戦していたので、黒丸はその家老の顔を見知っていたのである。吉継は長く病に苦しんだとされるが、立身の過程で三成と深く関わって来ただけに、真田とはまた違う意味で腹の内が気になる存在ではあった。

と、山門に三人の男が音もなく現れた。気が付かなかったのは、彼らが参道ではなく、わざわざ林を抜けてここまで来たのに、灯明などを一切使っていかなかったからだ。近くの枝にいた梟ふくろうが丸い顔を傾け、彼らを見下ろしている。

(先ほどの七人に加えて、これで十人…)

真田にはそれぞれに技を持つ十人の遣い手があると聞く。彼らがそうなのかもしれない。あとから来た三人の中に身のこなしに風格を感じさせる長身の者がいた。

(あれが才蔵ではないか…)

鬼丸は身を固くした。黒丸も目を凝らして三人を見つめている。三人は門から中には入らず、見張りをするらしい。

鬼丸たちは少しでも近づいて、密談の内容を聞き取りたいところだが、これだけ嚴重に

警備をさせては、騒ぎを起こすだけである。それよりもここで密談が行われたことだけでも、里に知らせることが肝要だ。

黒丸はいったん離れようと鬼丸に目配せをしたが、鬼丸は動こうとしない。強い敵を目にして、緊張と闘志で動けないのだ。かつて黒丸にも同じ経験があったからよくわかる。だが、今は戦う時ではない。二人の足元は夜露でじつとりと濡れた。

結局、朝方まで、山門を見張ったが、それ以降、訪ねてくるものはいなかった。

明け方、まず、大谷家の家老が出てきた。山門辺りを掃除する寺僧にも声をかけ、落ち着いた様子だ。烏森三左衛門が見送りに出ていた。話し合いはうまくまとまったに違いない。念のため、黒丸があとをつける。

昌幸が出てきたのは、日がかなり高くなってからであった。残念ながら、男たちに囲まれ、表情は見えなかったが、

「おはとがうるそうてのう。ここではゆるりと寝れたわい」

などと、のんきそうに話をしている。そのすぐあとに例の三人組も従う。一行の行き先はおはとのいる温泉宿と察しがつく。鬼丸は距離をおいて追跡することにした。暗い林を抜けると、日がまぶしい。雨が極端に少ないこの地は、今日も快晴だ。おかげで見通しがよく、昌幸の乗る馬と侍たちの姿もよく見える。歩きながら、鬼丸は黒丸に教えられた心得を思い出していた。何よりも大事なものは、生きて戻り、知り得たことを里に知らせることである。たとえ仲間が斃^{たお}れても、決して声を発してはならない。声を出した分、逃げる時間がなくなる。十九にもなつてこどものような教えを反芻している自分が情けなかったが、鬼丸がこどものころの北条攻めの戦以来、忍びが活躍するような現場はなかったのだ。結果、実戦経験を積む機会がないまま、ここまでできてしまった。行き先が見え見えの尾行だが、敵方に霧隠才蔵がいると思うと、気が抜けない。

宿が目の前、というところで大谷の家老をつけていた黒丸が戻って来た。急ぎ走りてここまでできたせい、日差しを避けるための頬被りの顔色がよくない。

「あのまま敦賀か大坂に向かうつもりらしい」

敦賀は大谷の領地であった。

二人とも溜池工事の農夫の格好をしているので、目立つことはない。一行が、宿に入るところを見届け、のどが渴いた二人が宿の先の小川に向かおうと歩き出した時だ。

「これからどこへ行く」

低い声がした。振り返ると、日の当たる道に堂々と才蔵が立っていた。黒丸ですら、近づいていたことに気が付かなかった。本来なら、わざわざ忍びが顔をさらして、道の真ん中に立つなどというのは、畏だと気づくべきだった。だが、経験の浅い鬼丸は、焦ってしまった。

「溜池を掘りに……」

とっさに鬼丸の口から出た言葉を、才蔵はとがったあごと鼻で、ふんと吹き飛ばす。

「おぬしらの主は誰だ……おそらく徳川か。だが、おぬしらも仲間も、何もつかめまい。つかめたとして、生きては返さぬ」

(仲間……おもうのことかっ)

鬼丸が短い忍び刀を手に、猛然と走り出した。挑発に乗り、才蔵にあと二人仲間がいたことを忘れている。黒丸は、

「よせっ」

叫んだが遅かった。才蔵からかなり離れた茂みから、鬼丸に向かって矢が放たれた。

「ぐっ……」

矢が貫いたのは、鬼丸を抱き込むようにかばった黒丸だった。矢は脇腹に深々と刺さっている。ずるずると倒れ込む黒丸を見た鬼丸は、一瞬、口を開きかけたが、黒丸の体を盾にするようにしながら、体を反転させ、駆け出した。その背に二の矢、三の矢があびせられたが、どれもはずれたようだ。鬼丸の姿はみるみる小さくなった。

そのころ、湯宿では昌幸が屋敷に引き上げると言い出し、おはとが頬をふくらませている。

「せっかくの名湯ですのに。もっと湯に入りとうございます」

「わしもいろいろと忙しいのじゃ。また、ゆるりと参ろう」

「きつとです。約束してくださいませ」

慌ただしく出立の準備をすることになり、婆たちも荷物をまとめるのにあたふたしている。おもうはがらんとした炊事場で最後のかまどの火を落としていた。

「……おつた、と申したな」

背後から不意に声がして、おもうは驚いた。おつたとは、かつて忍城の戦の際に使っていた偽名だった。身元が知れたか。素手のおもうの目は、とっさに使えそうな得物を探す。

声の主は、三左衛門だった。その後ろには、昌幸もいる。

「……」

昌幸は、上から下へとなめるようにおもひの姿を見ながら、言った。

「我らに正体をつかませぬためだろうが、ずいぶん、姿かたちを変えてきたの。それだけ危うい思いをしてまで、この地に入ったのは、源次郎(信繁)に会うためか」

「……」

「そなたが、あの折、源次郎と割ない仲だったことは承知しておる。だが、源次郎はここにはおらん。大坂じゃ。わしもまもなく戻る。お前がどうするかはお前が決めることじゃ。それにしてもよう化けたのう。じゃが、わしの目はごまかせぬ。わしは好みの女のこととは忘れないのじゃ。忍城の陣で源次郎を介抱するお前を見て、わしにくれと言ったら、源次郎と三左衛門にこっぴどく叱られた。あれから、もう十年になるか。お互い、よう生きていたものじゃ」

あの時……。足に傷を負った信繁を介抱した自分は十七歳のこどもだった。三左衛門の声を聞いたのは、その折だろう。自分が、此度、真田の動きを探るお役目に手を挙げたのは、一目、信繁の姿を見たからだだったのか。昌幸のあけすけな言葉で、ずっともやもやとはつきりしなかったものが固まりになって、胸に落ちてきた、

「……」

おもひは後ずさりしながら勝手口から外に出て、姿を消した。

「……もう、よかろう」

才蔵の声がして、黒丸は起き上がった。脇腹に刺さった矢は、矢じりが落としてあり、殺傷能力は極めて低い。浅手は負ったがすぐに抜けた。

「あいつは矢の名人だ。狙い通りに当てよった」

「かたじけない」

「手練れの忍びを一人葬ることができれば、りっぱな手柄じゃ。それにしても、浅黄の婆から、おぬしのつなぎを聞いた時は驚いたぞ。『わしを殺してくれ』とは」

「このあたりの忍びのことは、浅黄の婆に聞けば、なんでもわかると聞いていた。その通りじゃった」

「確かに。昔から誰もあの婆には逆らえぬ」

いつも明け方は信濃国分寺に、夕暮れには生島足島神社に姿を現す婆については、忍びの頭領の妻だったとか、過去の領主の側室だったとか、中にはこの地の太陽と大地を象徴

する陽ノ宮碧の使いだという者もいる。

才蔵は、猿飛佐助、穴山小助、笈十蔵ら十人の遣い手が浅黄の婆によって信濃国分寺に招集された夏の朝のことを思い出す。昇り始めた朝日が、後の世にレイラインと呼ばれる一本の金の光の帯となって、十人を照らした。それまでバラバラに動いていた男たちは、この瞬間、結束した。彼らは「真田十勇士」として、後の大坂の陣で信繁の戦を支え続けることになる。

「婆に会うことがあれば、礼を言ってくれるか」

黒丸の声に我に返った才蔵は、「承知」と言いながら、胸にあった疑念を口にした。

「こうまでしてなぜ、里を抜ける。里抜けはきつい法度のはず」

重要な情報を敵方に売る危険がある里抜けの忍びは、かつての仲間に追われる身となり、見つければ命はない。才蔵は黒丸には何か目的があると感じていた。自分が死んだことにしたのも、己を守るためというより、黙って抜けて、鬼丸たちの士気が下がることを避けるためと見ていた。

「……これから、どうする」

「墓守じゃ。わしの命はそう長うない。それまでに少しでも墓を作りたい」

「……伊賀か」

天正九年(西暦一五八一年)の伊賀の乱は、凄惨を極めた。織田信雄率いる五万の兵により、伊賀の民は、男も女子供も老人もなで斬りにされ、里を焼き尽くされた。死者は三万にも及んだという。黒丸は目の前で自分をかばった両親を殺され、必死に山に逃れたのである。

「わしは死ぬが、鬼丸は生き残った。あれは強うなるぞ」

「面白い。じゃが、わしはお前とも一度戦ってみたい。この先の信濃国分寺にはありがたい薬師瑠璃光如来がおわす。病を癒し、大戦に備えよ」

黒丸は、うなづいたように見えたが、何も応えず、脇腹を抑えながら、乾いた道を去って行った。

翌年、毛利輝元を大将に石田三成が率いた西軍と徳川の東軍が関ヶ原で激突。真田は昌幸と信繁が西軍として上田城で徳川秀忠の大軍を引き留め、信幸は東軍として戦った。どちらの勢力からも人質として狙われた昌幸の正室を密かに匿ったのは、大谷刑部だった。

戦場では、たくましく働く鬼丸がいた。

黒丸の姿があつたかは、定かでない。